

優秀賞

「あの子の笑顔」

島本町立第二中学校 二年 まえんご 前迫 あかね

Fさんは小学校四年生か五年生のクラス替えの時に転入してきた。第一印象はニコニコしてて明るそうな子だなというものだった。でも、隣にいつも支援学級の先生がいたので、何か障害があるのかな？とは少し思った。先生がFさんについて話をしたのは、Fさんが支援学級の教室で授業を受けている時だった。

「みんな気付いてるかもしれないけど、Fさんには障害があります。知的障害とって、みんなよりも行動が幼かったり、コミュニケーションを上手に出来ない事があるものです。できる限りでいいので手助けしてあげてください。」

少し教室のみんながザワっとなった気がした。

それから数日たったある日から、みんなのFさんとの接し方が変わってしまった。Fさんを菌扱いし

たり、先生がいない間に机をけったり…。その頃の私ほもめ事とかいじめに関わるのが恐くて、止める事ができなかつた。でもFさんは、暴言を吐かれてる時も机をけられた時なぜかニコニコしていた。こんな状況でなんでニコニコできるのかが私は気になった。Fさんと私は時々しゃべったりしたけど、すごく仲良いつて訳でもなかったのので「どうしていつも笑ってるの？」なんて事は聞けなかつた。

六年生になってFさんとまた同じクラスになった。Fさんに

「また同じクラスやん！（笑）よろしく！」
と言ったら

「えーまた一緒なんすまあいいわ〜（笑）」と笑顔で返してくれた。それから私は、Fさんにたくさん話しかけるようになった。Fさんへのいじめもないし、逆にFさんと仲良くしたり支えてあげる人が増えたからかもしれない。

Fさんもすごく変わった。五年生の頃は自分の事でいっぱいだった感じだったけど、けがをしてる人や体調が悪そうな人に気付いて

「○○だいじょうぶ？」

と声をかけられるようになった。きれいに漢字も書けるようになったし、みんなと一緒に授業を受ける事も多くなった。苦手な牛乳もゆっくりだけど飲めるようになった。

「ありがとう。」

「ごめんなさい。」

もちゃんと言えるようになった。Fさんもすごい成長したなあ。となぜか私も思ってしまった。

卒業まであと少しの給食の日、Fさんの食べるスピードが一段とゆっくりなのに気付いた。

「どうしたん？」

と聞いてもなかなか返事をしてもらえず、ついには机に顔を伏せてしまった。Fさんの様子に気付いて、一人また一人と声をかけるとFさんは顔をあげた。なぜか涙目になっていた。

「どうしたん？」

ともう一度聞くと

「みんなとおなじ中学校いかれへんねん。」

「もっとみんなと一緒にいたかった。」

そばにいた友達と顔を見合わせた。Fさんは中学か

ら府立の養護学校に行く事が決まったみたいだった。寂しい気持ちもあったけど、もっと一緒にいたかったという言葉に感動した。六年生になってからFさんと向き合ったのは遅くはなかったことが、その言葉で感じられたから。

障害のない健常者だからといって、私達は素晴らしい人間でも何でもない。だけど私達は、障害のある人に対して、よく知りもしないで偏見の目で見たり、自分は優位な立場にいると勘違いする事がある。いじめられてるのにFさんがニコニコしていたのは、自分にしゃべってくれたのがうれしかったのかなと考えると胸が苦しくなった。

私は健常者の一人一人がちゃんと障害のある人と向きあえば、平等に楽しく一緒に過ごせるのが不可能でなくなる日が来ると思う。中学校二年生になった今でも、Fさんはすれ違う私に気付くと名前を呼んでくれるから。あの可愛い笑顔で。